
 記 事

例会記録

日本医史学会 11 月例会

令和2年11月28日(土)

順天堂大学10号館105カンファレンスルーム

(オンライン)

- 第25回富士川游学術奨励賞 受賞記念講演
江戸時代の経穴学にみる考証と折衷
——小坂元祐と山崎宗運を事例に 加畑聡子
- スペインかぜ流行とわが国の衛生行政
——内務省衛生局『流行性感冒予防心得』と
大日本私立衛生会『予防注意書』の比較を中
心に—— 逢見憲一

 日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
会 合同12月例会

中 止

日本医史学会 1 月例会

令和3年1月23日(土)

(オンライン)

- 歴史学と文学との関係についての一考察
西巻明彦

例会抄録

翻訳者フナインと『医学問答集』：イスラーム医学の形成

矢口 直英

イスラーム世界の医学の歴史は9世紀に始まる。アッバース朝の初期に当たるこの時代に周囲の文明への関心が高まり、様々な文献がアラビア語に翻訳されていった。医学ではフナイン・ブン・イスハーク(873年没)と彼が率いる翻訳者集団が、ガレノスの著作を中心にギリシアの医学文献を翻訳した。彼らの活動の結果、当時既に失われていたものを除いて、ガレノスの著作の大半がアラビア語で読めるようになり、その後の時代における医学の発展の基礎が築かれた。

ガレノスの著作が中心となったのは、イスラーム勃興以前の中東や地中海世界においてガレノスの医学が支配的な影響力をもっていたからである。古代末期、5世紀から6世紀ごろには、エジプトのアレクサンドリアが医学教育の中心地となっていた。そこではガレノスの著作の要約書が

作られていた。また別に、ガレノスの著作に基づいて「アレクサンドリア集成」と呼ばれる翻案が作成されていた。これはアラビア語版のみが現存するが、その写本にはフナインによって翻訳されたという情報があるため、ギリシア語で編集されていた可能性がある。このようにアレクサンドリアではガレノスの著作が広く研究されていたが、アラビア語の伝承によれば、数多いガレノスの著作の全てが研究されていたわけではなく、一部のものに限定されていた。それらはガレノスの「十六書」と呼ばれる著作群として伝わり、アレクサンドリア集成についても同一のタイトルが纏められた写本が残されている。十六書は、イブン・ナディーム(990/995/998年没)の『書誌目録』によれば、『学派について』、『医術』、『初心者のための脈拍について』、『グラウコンへの治療法につい